新刊紹介

伊藤邦武著
『ケインズの哲学』(岩波書店、1999年6月発行、2800円+税)

原田 明信

ケインズ経済学研究と称して、日本では、特に『一般理論』(1936年)の理解およびその受容を目的として、おびただしいほどの解説書、解説論文が公刊され続けている。しかし、これらは人間ケインズを内在的に研究するという純粋目的というよりはむしろ戦後経済体制の再編成とのかかわりでの政策立案目的でその多くが執筆されてきていると考えられる。そのような環境のなかで、哲学(科学哲学も含めて)研究の側から、大学入学後から死にいたるまでの人間ケインズを今まで以上に広範囲にして詳細かつあざやかに整理してみせてくれる和製の本格的な哲学書(ケインズ理論の哲学的側面)が最近になって初めて現れた。それが、伊藤邦武氏による『ケインズの哲学』(1999年)である。

まず、序「ケインズのミリュー」では、本書において展開される求めるべきケインズ像は、既にあるイギリスの哲学的伝統に囲い込まれた思想家の姿ではなく、そのような伝統に対峙し格闘してきた思想家の姿であるとしている。伊藤氏は、そのような文脈のなかでこそ、ケインズが最終的に到達できたヴィジョンの姿を明示化できると考えている。ここは、誠に論争的なスタートである。

1902年にケンブリッジに入学したケインズは、ただちに、ムーア(概念実在論、この時期は主に倫理学的推論の正当化を志向する)やラッセル(論理主義、この時期は主に数学の論理学への還元化を志向する)がリーダー格の、いわばトリニティー・グループとも呼ばれる分析哲学者集団との親交を深める。この時期のケンブリッジ哲学の発展に対して、さらに、ラッセルのもとで数学基礎論と論理学の研究を始めたウィトゲンシュタインが加わるが、ケインズは当然ウィトゲンシュタインに対しても1915年ごろから書簡のやり取りを行う。特に、ムーアとケインズとの関係に関して、ケインズの『確率論』の着想(確率の論理的関係説)の源はムーアの『プリンキピア』にあるという伊藤氏の指摘は注目に値する(第1章「ムーア、ラッセル、ウィトゲンシュタインとの交流」より)。

第2章「ケインズの認識論の発展」では、ケインズの初期論考、『確率論』、「若き日の信条」、および『一般理論』への流れのなかでの認識論上の展開をケンブリッジの仲間との交流を通じて扱い、さらには『確率論』の認識論の基礎について詳しく論じられている。伊藤氏は、『確率論』から『一般理論』への「連続性」の哲学的根拠として、「不確実性をめぐる人間精神の学」(58頁)を挙げているが、同時に、「連続性」を壊さない範囲で、『一般理論』における不確実性と『確率論』における確率(蓋然性)の理論との間にある非同等性にかんがみてのある種の哲学的変換の実行を指摘している。「連続性」とは、理論的苦闘によるジグザグした非直線的発展のことである。

伊藤氏は、ケインズは帰納法について一貫して興味をもっていたと指摘するが、私もまったく同感である。ただし、第3章「科学方法論をめぐる歴史的考察」において、ケインズは、『確率論』第3部に見られる帰納法の存在論的前提もしくは根本的仮説を説明し、それに基づいて第5部において、帰納的推論の根本仮説と統計的推測の前提との「食いちがい」(116頁)、および後者の論理の誤りを指摘していると説明される。また、ケインズは経済現象には帰納法の存

在論的前提は適用不可能であると考えていることも指摘されている。要は、ケインズは、一方で帰納法を志向しつつも、他方で「経験と数学との根拠のない結合」(170頁)を厳しく批判するのである。私は、ここに、統計的推測に対するケインズ見解の経済学的意義の一つが浮き彫りにされたように思う。

ケインズが固執する帰納的推論の妥当性を与えるための「帰納仮説」は、主に、「原子的斉一性の仮説」と「有限多様性の原理」の二つである。『一般理論』においては、ラムジーからの批判を受け入れ、ケインズは確率論理説を放棄する。この際、「有限多様性の原理」とは別に、確率についての「無差別原理」を設定する。しかし、後者についてはやがて自己破綻してしまう。私は、経済学から見た数学および統計的推測(統計学)のもつ従属的性格に関連して、ケインズは『一般理論』第21章「物価の理論」において、「間違いのない答えを出してくれる機械、あるいは盲目的操作の方法を提供することではなく、個々の問題を考察するための組織化された秩序だった方法」(174頁)の構築こそが、ケインズがもつ一貫した、不確実な関係性を基礎にした帰納法志向の真髄ではなかろうかと思う(第4章「ケインズの科学方法論」より)。

結び「新しいモラル・サイエンティスト」のなかで、伊藤氏は、後期ウィトゲンシュタインの論理学思想とケインズの思想との関係について、特に、人間の精神活動の媒介役として、前者に対しては「言葉」に、後者に対しては「貨幣」に注目している。その際、伊藤氏は、後者の取り扱いについて、「われわれは『一般理論』の貨幣論のみならず、それに先行する『貨幣論』にまで踏みこんで考察しなければならない」(196-7頁)と記述しているが、これはケインズ経済学研究者に対しても十分に通用する大変鋭い指摘である。

本書の特徴は、全体を通じて、ムーアの倫理学思想を出発点としたケインズの哲学が30年間の理論的苦闘を経由して、〝経済学イコール精神科学(モラル・サイエンス)の一分野〟という新しいヴィジョンに到達したという事実が、歴史的かつ明快に書かれているところにある。

最後に、私は、自ら設定した長期的な課題への挑戦の一つとして、1989年から今日まで、『貨幣論』から『一般理論』までのケインズ経済学方法論という従来型の研究射程を拒絶し、『確率論』を新始点として『貨幣論』を経て『一般理論』の完成までのケインズ学問方法論という、欧米では相当以前からなされているが日本では非常に新しい課題設定に基づき、「ケインズの哲学と経済学」について苦戦を続けてきている。私は、ケインズには、一貫して、「不確実な関係性を基礎にした帰納法志向」が存在していると確信している。伊藤氏の『ケインズの哲学』の出現は、苦戦続きで浅学菲才な私にとっては、とてもまばゆいものである。

ジェフ・ホーキンス著

『考える脳、考えるコンピュータ』(ランダムハウス講談社、2005年発行、1900円)

工藤 孝史

アナムネーシス。日本語ではたぶん「思い出す」という意味。この言葉を最初に耳にしたのは大学院で哲学を勉強していた頃だったと思う。哲学史の参考書でよく目にしたので言葉の響きだけをよく覚えているのだ。知識というのは私たち一人一人の身体(個体)がゼロから形成して行くのではなく、もともとは身体を離れた(つまり個体が生まれる以前の)イデアの世界にあって、人間はそれを「思い出す」にすぎないといった主張だったように思う。